

教科書の最後から始める 中学の英語

Otozuki Tetsuo

弟月哲夫



目次

第 1 部 語順訳と音読

19

第 1 章

語順訳とはどのようなものか…………… 20

1-1 How? 語順訳の基本…………… 20

1-2 Why? なぜ語順訳を行うのか…………… 28

1-3 How? 教科書作品の語順訳例…………… 33

1-4 What? 何を語順訳するのが良いか…………… 47

1-5 語順訳の段階と訳の復習について…………… 51

第 2 章

音読について…………… 56

2-1 How? 音読のいろいろ…………… 56

2-2 音読における知識学習と表現体験…………… 58

2-3 ○や×で終わらせない…………… 60

2-4 人称代名詞と音読…………… 63

第 3 章

作品として向き合う	68
3-1 内容の理解に終わりはない	68
3-2 Why? 作品へのこだわり	71
3-3 情報と表現	73

第 4 章

英作文と音読	78
4-1 知識を問うことのリスク	78
4-2 日本語から英語の世界へ飛び移る	80
4-3 日本語の影響に、どう対処するのが良いか	83

第 5 章

中学校でのグループ学習	90
5-1 知らないことを恐れず、前に進む	90
5-2 グループ学習	92
5-3 表現を競い合う 朗読会、劇発表	94
5-4 例文を、生きた言葉に変える	96

第 6 章

第 1 部のまとめ	100
-----------	-----

6-1 言葉と私	100
----------	-----

6-2 仮説と実践 ～英語嫌いを少なくするために～	101
---------------------------	-----

第 2 部 言葉について

第 1 章

規範について	112
--------	-----

1-1 知識（文法）を規範にまで引き上げる	112
-----------------------	-----

1-2 日本語から離れる	118
--------------	-----

1-3 子どもたちのいる場所	122
----------------	-----

1-4 「易しいもの」から「難しいもの」へ、という考え方	126
------------------------------	-----

1-5 子どもたちの成長を考える	129
------------------	-----

1-6 語順訳再考	132
-----------	-----

第 2 章

語順訳の価値は音読で決まる…………… 142

2-1 例文と物語文…………… 142

2-2 英語の木を育てる…………… 145

2-3 主語について…………… 149

2-4 「は」と「が」…………… 156

2-5 音読・音読・音読…………… 162

2-6 言葉のちがひ…………… 167

2-7 部分と全体…………… 171

2-8 声とリズム…………… 179

2-9 論理的ということ…………… 187

第 3 章

方法論…………… 192

3-1 振り返り…………… 192

3-2 日本語の引力…………… 196

3-3 言葉はコミュニケーションの道具か？…………… 201

3-4 方法論…………… 203

はじめに

中学1年生の1学期、最初の授業日に、多くの教科書で後半に掲載されている、リーディングのための長文作品を読み始めてみてはどうでしょうか。本書で提唱したいのは、そのことです。

作品に向き合う、それだけで、学習が楽しみとなり、また英文の感覚が育ちます。もちろん、並行して語彙を増やしたり、さまざまな文例を実践的に使って覚えてみたり、文法を学んだりすることも必要ですが、まずは作品と呼ぶものを読み始めてはいかががでしょう。詳しいルールを知らなくても草野球を楽しむことはできます。泳ぎ方を知らなくても、海に浮かべば、自然に体が動きます。まず初めに「その世界」に飛び込む、そうすれば、それにまつわる知識もまた身近に感じられ、意味あるものとなるでしょう。ただ、1年生のものだと、表現の制限が多いせいか、それほど充実した作品とは呼べません。むしろ2年生、3年生のものを1年生で取り上げるくらいがいいと思います。本書は、主に中学生を対象に指導に当たっておられる、学校や塾の先生方を念頭において書きました。

私が代表を務めている英語教育団体があります。活動を始め

てから、今年（2022年）で48年が経ちました。本書はここでの経験を踏まえて、基本的な方法と考え方を述べたものです。「作品」を英文の語順に沿って訳すことに加えて、スラスラと言えるまでの音読練習と、朗読や劇などの再表現を試みるのが、どれほど学習を有意義なものに変えてくれるか、それをお伝えしようと思いました。私たちの団体に所属されている指導者の方たちから、貴重な話を聞き、時には授業を見学することで、考え、まとめたものです。英語教育にたずさわる皆様にとって、お役に立てる内容になっていれば幸いです。

本書は、こうすればすぐにこういう効果が出る、といった類のハウツー本ではありません。むしろ言葉についての立場、考え方を示しているもの、と言っていいかも知れません。もちろん私たちにとって、成果と呼べるものがありますが、それはある意味、特別なものではありません。どのような学習法で学んでも、成果は出るでしょうし、また何をもって成果と呼ぶかもいろいろでしょう。英語を学習対象として考えると同時に、ひとつの言葉としてとらえる、ということ念頭に置いて書きました。英語力を手に入れる過程とはどういうものか、ということについてもあれこれ考えてみました。

英文を語の順序に沿って訳す「語順訳」と、それに伴う「音読」について多くのページをあてました。同じようなことをされている人たちが、たくさんおられると思います。しかし、「言葉としての英語」という観点からの学習法について書かれたものは、ほとんど見かけないように思われます。

言葉の習得は、たとえそれが外国語であっても、実際に使われたもの、表現と呼びうる言葉の世界から始めるべきである、というのが私の主張です。泳ぐ練習を安全な波打ち際で行うのではなく、子どもたちをいきなり海の真ん中に放りこみ、苦しませながら、自分で会得させる、という言い方が良いかもしれませんが。子どもたちはだれでも、未知の言葉に関心を持つものであると思います。その関心を壊すことなく育てていけるものこそ、「語順訳」であり、「自分の言葉としての音読」である、そのように考えることの意義を問いたいと思いました。

知識と体験

子どもたちにはそれぞれ固有の歩みがあります。みんなが一律に進むものでないのは言うまでもありません。また、同時にその英語理解の水準は、だれでもたえず揺れ動いているように見えます。多くの子どもたちにとっては、貯金のように、時間に伴ってストレートに理解がたまっていくことがなく、どちらかといえば、波打ち際の砂のように、たまったかなと思うと、また波にさらわれ消えていくと言えるのでしょうか。文字や単語を正確に読めていないのに文法学習をすることや、語順感覚をつかめていないのに、少ない知識を使って返り読みをすることは、とても効率の悪い学習であると考えます。しかし、英語もまた一つの言語である限り、英語のことを知りたい、使ってみたいという思いが強ければ、いつかはそれを手にできるはずだと思います。その方法は、かぎりなく心の自然にかなっているだろうと想像できます。また、ここで述べる方法は、すぐにはその成果が目に見えてこないけれど、しかし確かに日々積み上

がっていっていると、感じられるものでもあります。指導者も子どもたちも忍耐を強いられますが、たしかな実感を得られる時が必ず来る、そのような方法であると思っています。

この日本において、英語のネイティブスピーカーと日常的なつながりがなく、時間的な制約もある学習である限り、知識＝文法学習はもちろん避けることはできません。それに対して、私たちは、実際に使われている自然な英語、とりわけ物語作品を主として取り上げる学習を基本に据え、実践してまいりました。「自然な」というのは、条件付きの、意図的な場面での会話といったものではなく、著者がいて語り手がいる、「作品」というものの性格が備わっている状態を指しています。いわゆる表現された世界としての言葉との出会いが、もっとも重要であると考えています。レンガを積むように知識を重ねていく一般的な方法も必要ではあります。しかし、まずは生きている言葉に触れ続けること。とにかく英語の様々な姿、音の響き、リズム、イントネーション等々に触れること。つまりは、言葉の原点である音声に耳を傾けること。さらには「作品」を読んでいるうちに、自分に向かって何かを語りかけてくる言葉の響きを、直接受け止めること。こうした体験が英語力養成につながると考え、その方法論を模索してきました。心に触れる体験と知識学習、この二つの学習をうまく組み合わせていける方法である、と言えるかも知れません。

「語順訳」には、英語を知識として捉えることと、表現としても向き合うということの、二つの側面があります。その両面

から学ぶことが、大切であると考えています。さらに重要なことは、どのような文章も必ず「音読」をすることです。英語を学んでいる多くの方は、声に出して読まれているでしょうが、この「音読」にも知識としての学習の側面と、表現として向き合う側面があります。表現としての音読には、言ってみれば終わりはありません。単にスラスラ読めるというのではなく、ある水準を越えたところまでを目標とすることが肝要であると言えるでしょう。詳細は本文に譲りますが、私たちが48年間、さまざまに試みて見えてきたことは、表現として言葉に向き合う体験を積み重ねていけば、知識としての学習内容も、その理解が深まっていく、ということと言えるでしょうか。

仮説としての方法論

子どもたちに学習の動機と意欲がそなわっていれば、この方法でだれもが英語理解を一定水準にまで進めることができるはずですが。この「語順訳」＝英文を語順にそって訳す試み、は私たちが初めて行ったものではありません。昔から実践している人たちはいたと聞いています。また現在もいくつかの団体が学習法として取り入れているようです。

しかし、方法には基本となる仮説が必要であると考えます。仮説があるからこそ、事実にくいちがいが生じたときに検証することができます。確かな方法とは、アイデアやスキルを発案することにとどまることなく、どのような事実にも柔軟に対応できる軸をもっているものであると思います。思いつきや、自分がやってみて成功した方法が一般性をもつことも、もちろんあるでしょう。しかしそれだけでは、何が効を奏したかがわか